

# 言語学の明治草創期における

## B. H. Chamberlain

櫻井 美智子

B. H. Chamberlain 以前

明治以後のわが国の言語研究の歴史をどこで区切るか、いろいろ議論があると思われるが、ここでは次の様に区分することにする。

第1期 明治維新より明治19年まで (1868～1886)

第2期 明治19年より明治28年まで (1886～1895)

第3期 明治28年より第2次世界大戦終結まで (1895～1945)

第4期 第2次世界大戦終結より昭和32年まで (1945～1957)

第5期 昭和32年以降 (1957～ )

明治期の日本の言語学界は大別して二つの流れがあり、一つは classical 又は old school ともいうべきもので、他は scientific school といってよいと思う。前者はわが国在来の国学者の研究で、和学者、皇学者、古典学者、皇典学者等の名前の下に、わが国の言語、それも古事記・日本書紀・萬葉集や古い祝詞・宣命にあらわれている日本語を記述的に研究する一派である。一方後者は、開国以来海外から紹介された科学的原理を根拠として言語を研究するもので、英語の Philology, 独語の Sprachwissenschaft に当る。この学問は、広く各国の言語資料を蒐集し、これに科学的な分析、比較、分類等の方法を用いて、その性格、活用、起源、発達変化の過程や規則、種類等を究めるものである。長い鎖国のあと、1866(慶応2)年幕府が海外留学を許可して以来、当時活発な議論がわいていた19世紀ヨーロッパ言語学界の言語観、研究方法等の影響が漸く日本にも及んできた。この小論ではこの様な新しい萌芽の時期、即ち前述の区分の第2期にイギリス人 Basil Hall Chamberlain が日本の言語学界に果たした役割の意義を時代的背景をふまえて検討してみたいと思う。

この区分に入るまえ、下川契沖(1640～1701)、賀茂真淵(1697～1769)、本居宣長(1730～1801)たちを先達とする国学者たちの努力で言語学が盛になり、次第に科学的になって来てはいたが、それは古代日本の文化の研究を目的として、その手段としての国語研究であった。従って奈良・平安時代の書きことばの日本語を記述的に研究することを主眼として、現代語を研究対象にすることはなかった。しかし国語以外で特筆されるべきことがある。一つは河内の僧侶慈雲が、普賢行願讃、阿弥陀経、般若波羅蜜多心経、金剛経その他を含む「梵

学津梁」を1765年に著わしたことである。このことは1785年の Sir Charles Wilkins の訳より20年早く、仏教研究としてはヨーロッパの学者に半世紀先んじていた。因みに、比較言語学の始まりとされているイギリスの Sir William Jones がサンスクリット語とヨーロッパ諸語との関連性を解明しようとした “On the Hindus”<sup>(1)</sup> をカルカッタのアジア協会で発表したのは1786年2月であった。慈雲以降サンスクリット研究が余り発達しなかったのは、仏典が中国語に訳されていて、ごく最近までインドの原典に非常に忠実なものと信じられていたからである。ヨーロッパの学者たちが、自国語がラテン語やギリシャ語と同じ様にサンスクリット語にも類似性があるという有利な立場に関心を抱いていたのに対し、日本の学者たちは、サンスクリット語を科学的に観察する方法も、原典を取扱う方法も発達させることができなかった。長い間伝った悉曇学という伝統的な方法を破るのは明治維新後である。又1792（寛政4）年<sup>(2)</sup>には、アイヌ語学の鼻祖となる「藻汐草」が蝦夷通詞上原熊次郎と漁場の支配人阿部長三郎によって著わされている。

幕府は鎖国政策を1641年以降とっていたが、13世紀に Marco Polo が「東方見聞録」で日本をヨーロッパに紹介して以来、本州、九州、沖縄に基督教宣教のために又通商を求めに来航、あるいは漂流、密航するものがあり、外国人宣教師による日本語についての著述<sup>(3)</sup>や寄港者の旅行記にそえられた日本語彙集等も既に17世紀初頭にみえている。又西洋文明（殊に砲術・医術等）において学ぶべきものも少なくないので、江戸時代から蘭学者らによってオランダ語研究がなされていた。ポルトガル人宣教師、João Rodoriguez 及び Emanuel Barrete 等の *Vocabulario da Lingoa de Japam com a declaração em Português*（「日本葡萄牙対訳辞書」、長崎、1603 語彙数3万余、頁数810）は同じ教派の宣教師がそれまでに発行した数種の日本語葡萄牙語対訳辞書を参考にしたといわれ、この書は1630年にイスパニア語訳、つづいてフランス語訳されている。また翌年発行の同じ Rodoriguez 編 *Arte da Lingoa de Japam*（「日本言語の術」、長崎、1604）<sup>(4)</sup>の抜萃もフランス語訳されたが、フランス語訳は誤訳が多く不評であった。その後も辞書や文法書がローマ、メキシコで宣教師たちによって出されたが、Rodriguez のものに劣っている。19世紀では支那学にも通じていたオランダ人 Dr. J. Hoffmann のものが定評があり、なかでも、*A Japanese Grammar or Japansche Spraakleardoore*（「日本文典」、Leide、1868）は同時に英語訳を出版し、その研究の緻密さ、分類の確かさなども当時としては未曾有であったといわれる。日本人のものでは1801（享和元）年頃、志筑忠雄（中野柳圃）が自力でオランダ語文に語格・詞品のあることを知り、これを記して翻訳の便をはかり、遂に「和蘭詞品考」（「柳圃中野先生文法」ともいう——京都大学所蔵）をあらわした。依然鎖国中ではあったが、1809（文化6）年幕命によって長崎で英学が開始された。しかしその前年に高橋作左衛門景保が、ロシアから幕府に寄せられた満文の国書訓訳を命ぜられた時、幕府から文典「清文典」を貸与された事実

がある。のちにわが国英文法第1号「英文鑑」(1840・41年)を出した渋川六蔵敬直が高橋景保の甥にあたるので、敬直もこの時「清文鑑」を見る機会があったであろうと推測される。「英文鑑」は英学開始により約30年経って著されているが、これは18世紀の規範文法家 Lindley Murray の *English Grammar* (1795年) 第26版をオランダ人 F.M. Cowan が1822年蘭訳したものの再版と第3版から重訳したものである。これと前後して「<sup>フンゲリア</sup>諸厄利亜語林大成」(1814年)という最初の英和辞書や「和蘭文典」(1842・48年)が写本で出され、安政元(1854)年になって初めて版本で「三語便覧」(仏・英・蘭の三語)(1854年)、「仏英訓弁」(1855年)等が出されているが、いずれも既に外国で出版されたものを参考にしている。

1857年 Anton Boller が *Nachweis dass das Japanische zum Ural-Altischen Stamme gehört* (「日本語がウラル・アルタイ語族に属することを証明する」, Wien 1857) を出版したが、同じ年(安政4年)さきにロシアに密航した楠耕斉(1821~85)が Isosif Goshkevich とともにペテルスブルグで450頁をこえる和露辞典を出版。彼はその後 Vladimir I. Yamatov と称して1870~74(明治3~7)年ペテルスブルグ大学(the Univ. of St. Petersburg)で日本語を教授。大学で教えた最初の日本人である。

幕府は1860(萬延元)年遣米使を送った折世界を一周させて、オランダ語を仲介として西洋知識を吸収するのは遅いとさとり、蕃書調所で英語を教え、堀達之助に英語辞書編纂を命じている。この辞書は1862(文久2)年「英和对訳袖珍辞書」として洋書調所より刊行。今日の文法基礎語彙が殆どこの時訳語として作られた。蕃書調所は1861(文久元)年フランス語講座、同2年ロシア語講座を開設。その後名称も幕府の蕃書和解御用(1811(文化8)年)から洋学所(1855(安政2)年)蕃書調所(56年)、洋書調所(62年)、開成所(63(文久3)年)と改称し、幕末における洋学の研究及び西洋文化採用の中樞機関として多大の役割を果たした。その教職員は何れも各藩より集った新知識者であった。1869(明治2)年には大学南校となり(大学は大学本校(漢皇学)、大学南校(洋学)、大学東校(医学)の三校からなる)、77(明治10)年設立の東京大学の濫觴となっている。

このような機運の中で、所謂お雇い外人といわれる外国人や基督教宣教師たちのなかに、本来の活動以外に、日本語及び日本文化の研究、外国語(彼らの母国語)研究及びその教育等に貢献したものも少くない。医師であり、宣教師であり、ヘボン式ローマ字の考案者である J.C. Hepburn (美国平文) の様に、内容的にも高く評価されている「和英語林集成」(1867)という最初の和英辞書を刊行したものもいる。これは「古事記」から「東海道膝栗毛」にいたる著者の広い読書と周囲の人々の話す日本語から語彙が集められ、日本語をローマ字でつづった異色の辞書であった。

さて1868(明治元)年は明治維新の年であり、この年より明治期に入る。新政府は海外留学規則を70(明治3)年に定めて留学を奨励したので、この年から急激に留学生が増加、翌

年9月にはその数281名に及んでいる。1871(明治4)年には Ioan Nikolaj Kasatkin (1836~1912) が再度来日し、東京にニコライロシア語学校を開設。73(明治6)年には、のちのわが国言語学界にパイオニアとして貢献する Basil Hall Chamberlain が22才で来日している。Chamberlain は1886(明治19)年東京大学博言学科が開設されるや初代の教師となるが、それまでにロンドンの *The Cornhill Magazine* に“Jitsu-go-Kiyo(The Teaching of the Words of Truth)”(1876(明治9)年8月)、そして *Transactions of the Asiatic Society of Japan*<sup>(5)</sup> に“On the Use of ‘Pillow-Words’ and Play upon Words in Japanese Poetry”(1877(明治10)年)、“On the Mediaeval Colloquial Dialect Spoken in Ahidzu”(1881(明治14)年)を、*The Chrysanthemum* に“Notes on Japanese Philology”(1883(明治16)年)、*TASJ* Vol.13に“The So-Called ‘Root’ in Japanese Verbs”(1885(明治18)年)を発表、79(明治12)年には一貫堂より和文で「英語変格一覧」上下2巻を、83(明治16)年には *TASJ* に「古事記」全訳を公けにしている。なかでも83(明治16)年の“Notes on Japanese Philology”は国語学雑考という様なものであるが、日本の古い言葉と現代の朝鮮の言葉とを対照して、両語における「テニヲハ」の本源を一つとする所以を明らかにした、比較言語学上有意義なものである。もう一人この時期に日本の言語学界に影響を与えた外国人学者にドイツからイギリスに帰化した Friedrich Max Müller がいる。西本願寺の僧侶、南條文雄博士、笠原研寿氏が1876(明治9)年イギリスに留学、79(明治12)年よりオックスフォードで、サンスクリット語及び比較言語学の権威、Max Müller の下で研鑽をかさね、笠原氏は病をえて82(明治15)年に帰国、間もなく歿しているが、南條博士は84(明治17)年までとどまって、「大明三蔵聖教目録訳補」(1883)を、また Max Müller と共著で、*Buddhist Text from Japan 1. 金剛經* (1881)で慈雲の「梵学津染」(1765)のある部分の改訂を行い、つづいて *Buddhist Text from Japan 2. 阿弥陀經* (1883)を出版している。彼は帰国後東京大学文学部嘱託講師として梵語を担当(1885(明治18)年2月)これが東京大学梵語講座開講の礎となっている。

#### 明治草創期と B. H. Chamberlain

さきに述べた区分に従い第2期すなわち1886(明19)年より1895(明28)年までをここでは日本における言語学の草創期と名づけよう。1886年は1877(明10)年4月に開校した東京大学に始めて博言学科(のちの言語学科)が開設された年であり、1895(明28)年は B. H. Chamberlain が一連の琉球語に関する研究の結果、日本語が琉球語と sister language の関係にあり、同じ祖語をもつものであるという、画期的な意見を世に問うた年である。第1期において西欧の言語学に始めて接し、それがいよいよ日本の土壌に根をおろす時代で、この時期の B. H. Chamberlain の足跡をたどってみたい。

1886（明19）年は丁度東京大学が組織を変更し、法・医・工・文・理の五分科大学からなる帝国大学と改称（同年4月12日）した年に当たっている。その年4月1日に文科大学は第一哲学科・第二和文科・第三漢文学科・第四博言学科を設置し、その新設の博言学科で博言学すなわち今日の言語学の講義と日本語学を講ずるために B. H. Chamberlain が迎えられた。これについては当時の関係者、文部大臣森有礼、総長渡辺洪基、文科大学長外山正一、文部総局長辻新次たちの英邁潤達な人柄と識見に加えて、のちの国語調査会委員長であり前大学総理であった加藤弘之の主張と努力があって実現をみたといわれている。すなわち加藤弘之博士は大学総理当時明治13年頃から、博言学を振興すべきことを時の東京学士院に向って建議し、院長西周博士の駁論もあったが、19年にやっと機運をえて大学に新設をみたのである。日本人が自国の言葉や文典をイギリス人から学ぶということは奇異な感じがするが、これは Chamberlain が1873（明6年）来日以来約15年の間に博言学者・日本語学者として非凡な才能を示し、わが国上代文学の研究に没頭、古事記・日本上代詩歌等の英訳や幾多の論文を発表、その組織的科学研究におけるすぐれた創見と蘊蓄を認められた結果であり、また当時の日本に、方法論に立脚した如何なる実用文法も教授法もなかったからである。しかし東京大学での講義も僅か4年にして1890（明23）年9月には眼病のため辞し、翌年大学より名誉教師の称号を与えられ、その年の末一時帰国している。東京大学に招かれた1886年、彼は *A Simplified Grammar of the Japanese Language* をロンドンの Trübner 社から出版。同年 *TASJ* Vol. 14 に “Past Participle or Gerund? — A Point of Grammatical Terminology” を発表。当時大学で講義をきいた上田萬年博士や芳賀矢一博士らの述懐によると、この年彼らは始めて Herman Paul とその著 *Prinzipien der Sprachgeschichte* の名前や William Whitney とその著 *Life and Growth of Language* の名前を耳にしたということである。

同じ年、明治5年に出版されたヘボンの辞書が高橋五郎の助力で1万語を加えて丸善から増補出版されている。この年に Chamberlain は大学から北海道に出張し、アイヌ語を調査し翌87（明20）年の帝国大学文科紀要第1冊（Memoirs of the Literature College, Imperial University of Japan, No. 1）に “The Language, Mythology, and Geographical Nomenclature of Japan, Viewed in the Light of Aino Studies”（「アイヌの研究からみた日本の言語・神話及び地名」）として発表し、アイヌ語は日本語とどういう関係に立つ言語であるかあきらかにした。又東洋学会雑誌に「蝦夷語ト日本語ノ関係」という小論を11月につづいて発表している。同じ年文部省の依頼で「日本小文典」を和文であらわし、日本人の国語学研究勃興の導火線となった。翌1888（明21）年には *A Handbook of Colloquial Japanese*（「日本俗語文典」）をロンドンの Trübner と東京の博文社から出版。日本の俗語の文典が国語調査委員会では着手されたのが1902～07（明35～40）年頃であるから、この出版はこれに先

立つこと約20年前であることを思うと、「日本俗語文典」がわが国の言語学・国語学研究者たちに果たした役割は大きい。すぐ翌年に第2版、10年後に第3版が出されているのも当然である。又東京大学での最初の弟子である上田萬年博士がこの年に卒業し、師をたすけて出来上った、“A Vocabulary of the Most-Ancient Words of the Japanese Language”というわが国言語学界で記憶されなければならない論文が *TASJ* に発表された。

1890（明23）年の退官の年、*TASJ* に “What are the Best Names of the ‘Bases’ of Japanese Verbs?” を発表。その後一時帰国して又来日し、1893（明26）年には琉球の土俗及び言語を研究、その成果はこの年以後数年にわたって次々発表されている。言語学関係のものでは、1894（明27）年に *Report of the 64th Meeting of the British Association for the Advancement of Science*, London から “On the Loochooan Language” を、95（明28）年には *TASJ* に “A Comparison of the Japanese and the Luchuan Language” や “Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language” を発表。アイヌ語研究とともに不朽の業績となっている。

#### B. H. Chamberlain の業績

B. H. Chamberlain について記すべきことは多いが、ここではその業績を言語学関係に限り、テーマ別に述べてみたい。最初に区分した第2期以前の著作も多少含まれるのは、それらの著作が当然第2期の彼の研究活動のみならずわが国言語学界に影響をもっているからである。

##### a. 日本語文法・口語研究

第一に挙げられるのは文法・口語の研究分野である。上述の *A Simplified Grammar of the Japanese Language (Modern Written Style)* の序文で、日本語には口語と文語があり外国人は先づ口語を習得し、しかるのち文語を学ぶのであるが、この本は日本語の古典や言語学的研究のためでなく、現在用いられている文語を取扱って、外国人に現代の文学や手紙を読むのを可能ならしめるためのものであること、また、シンタックスから判断して、日本語に一番近い親族語は朝鮮語であり、両語のシラブルの中の母音の一致性を挙げ、モンゴル語、満洲語と同じ様にアルタイ語族に入れてよいのではないかということまで言及している。

本文は第一章に日本語の発音体系について述べ、アルファベットと発音との関係や濁音を生ずる音声的環境など科学的な分析がなされている。第二章以下は所謂文法であるが、外国人には殊にむづかしい文語を記述する適確さ、又その規則化の精密さに、彼の言語に対する鋭い洞察力と体系化する才能をみるのである。この本は非常に行届いた独習書ともいうべく、1922年になってアメリカ人 Major James Garfield McIlory によって改訂されるまで30年余

り決定版的性格をもって初版のまま人々に愛用された様である。改訂に当たった McIlroy 自身、自分が日本語を学ぶのに文語についての明瞭な見解を与えてくれた唯一の本であったと述懐している。絶版になったことを理由に、原著を十分に研究したのち、現代の学生にもっと価値あるものとするために簡潔性と実用性を目標として改訂した、と序文にのべている。

次は1888（明21）年の *A Handbook of Colloquial Japanese* Trübner, London, Hakubunsha, Tokyo である。口語文典については Chamberlain 来日四年前の1869（明2）年に既に William George Aston の *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language* F. Walsh, Nagasaki が出ており、Chamberlain の口語文典は決して最初のものではないが Aston のものが僅か40頁の小本に対し、Chamberlain のものは485頁に及ぶもので、理論篇と実用篇から成っている。最初の部分で、西欧のことばと全く構造を異にする日本語を学ぶのに大体の一般的な知識を先づ頭に入れ、それから身近な個々の文例を拾ってそれを覚え、実際に使う機会を探せ、というようにごく分り易く習得の方法まで教え、西欧のことばと日本語との発想のちがいについて具体例を挙げて注意を喚起したり、日本語の書記法及び日本語の発音上の特異性などにも行届いた **注意をあたえ、綿密周到な文法に及んでいる**。古事記・日本書紀など古い文語に通じていながら、俗語として軽んぜられていた口語の文法にもいち早く関心を示し、敢えて文典を著わすにいたったことについては、70年後の20世紀の言語学がその研究の資料を書きことばから話しことばに移している実状にてらして、非常に意義深いといわねばならない。このことに着眼していた Chamberlain の卓越した識見と、画期的な業績、そしてその充実した内容はともに高く評価されるべきである。

彼の口語への関心は既に1878（明11）年 *TASJ* Vol. 6に “On the Mediaeval Colloquial Dialect of the Comedies” や1881（明14）年同じく *TASJ* Vol. 9に “Notes on the Dialect Spoken in Ahidzu” に見ることができ、文法の面においては1885（明18）年 “The So-Called ‘Root’ in Japanese Verbs” *TASJ* Vol. 13や1886（明19）年 “Past Participle or Gerund ?” *TASJ* Vol. 14で先人の João Rodoriguez や J. Hoffmann の “root” という見解を是正したり、動詞の連用形をうける「て」というテニヲハを過去分詞と呼んでいたのを Gerund と解した方がよいなどという考察を公けにしている。しかし何といっても代表的著作は *A Simplified Grammar of the Japanese Language* (1886), 「日本小文典」(1887), *A Handbook of Colloquial Japanese* (1888) である。「日本小文典」は1887（明20）年文部省の依頼を受けて日本語で書かれたものである。この本以前に既に日本人による日本文典は何種類か出ていたが、それらは教科書用として「玉の緒」や「詞の八衢」を祖述するものや「英文典」をそのまま模倣したものなどで、日本語を客観的に記述したとはいえないものであった。Chamberlain の「日本小文典」は印欧語文典の学問的方法を用いて簡明にまとめられたものである。その序で、先人の業績を無視するものではな

いと断りながら、専ら初学者のために新たに考え出した日本語の規則の大意を示すものだと  
いっている。文法を定義している中で、「通俗にても正しく語りあふ術なり」といって国語  
を重視していることは注目に値する。今日から見ると、その構成や内容に批判や異論がある  
であろうが、当時漸く勃興の機運にあったわが国文法の研究者に与えた大きな刺激と影響を  
考えると、わが国の文法史におけるこの文典の存在は軽視できない。

#### b. アイヌ語研究

第二はアイヌ語研究である。アイヌ語に関しては既に述べた様にわが国では1792(寛政4)  
年「藻汐草」(又の名を「蝦夷方言」,「蝦夷人言葉集」,「蝦夷方言藻汐草」ともいう)の  
写本(のち版本)が著わされ、アイヌ語学に手をつけたイギリス人やアメリカ人そのほかい  
ろいろな人々はその前にも後にもあったので、Chamberlain は決してアイヌ語学の創始者で  
も開祖でもない。しかしそれまでのアイヌ語学(その後もその傾向がのこっているが)はア  
イヌ語がめづらしい言語であるからという好奇心や、消滅しそうだから書きのこしておこう  
というような動機でなされたもので、アイヌ語のためのアイヌ語であった。しかし Cham-  
berlain のアイヌ語学はその態度が全く異なり、日本語学のためのアイヌ語研究であった。  
日本語(国語)学はそれまで所謂内地の日本語をその言語資料としていた。

もともと Chamberlain は早くから日本列島を取巻く周囲の諸民族の言語に眼を向け(既  
に1883(明16)年の“Notes on Japanese Philology”<sup>(6)</sup>では日本の古い言葉と朝鮮の言葉  
とを較べ、古語のテニヲハ「い」とか「ろ」が朝鮮語のそれと意味においても用法におい  
ても同一性があると主張し、1886(明19)年の *A Simplified Grammar of the Japanese  
Language* の中でもこのことに言及している)それらの言語と日本語との関係を詳らかにし  
て、日本語の系統を明らかにしようという態度乃至方法をとっていた。この隣接言語への関  
心が先づ朝鮮語、次にアイヌ語、そしてその後琉球語に向けられた、と解釈してよいと思う。  
1887(明20)年、帝国大学文科紀要第1冊に“The Language, Mythology, and Geogra-  
phical Nomenclature of Japan, Viewed in the Light of Aino Studies”<sup>(7)</sup> という論文を  
発表し、すなわち、アイヌ語は日本語とどういう関係にあるか明らかにした。アイヌ語と古  
代日本語とを綿密に比較して両者の間に関連・類似の少ないこと、特に音声学的には非常  
に類似点があることを認めながら、それは有機的なものというよりむしろ偶然の相互影響と  
考えるべきだとし、結論としては両語は姉妹関係にないとしている。

その反証が15項目挙げられているが、主な理由としては、第一に日本語における助詞(テ  
ニヲハ)が *postposition* (後置)であるのに、アイヌ語ではその様なものもあるが、英語、  
独語のように *preposition* (前置)の助詞であるということ。第二に日本語のテニヲハは單  
語や句の頭に来ることは全くありえないが、アイヌ語のテニヲハはまだ純粹にテニヲハにな



りきっていないので、副詞の様に単語あるいは句の前に来ることが可能である。更にアイヌ語には語頭に a 音をつけて形容詞を他動詞にしたり、動詞の受身形をつくったりすることがあるが、日本語にはその様な接頭語はない、ということも指摘している。その他いろいろ異なる証拠を挙げたあとアイヌ語の特長である数詞について述べ、日本語とアイヌ語の数詞のちがいはもともとこの二つの民族が物をかぞえる習慣を異にしていた証拠であるとしている。

アイヌ語・日本語をこの様に比較したあと、この論文ではアイヌの神話と日本の神話を比較し、又日本各地の地名については、アイヌ語の意味から解釈してみるとその土地の状態や特色を端的にとらえているものが多いとしてその具体例を挙げ、日本列島にアイヌ人が先住していたのが、丁度アメリカインディアンが移民たちの圧力で西方に退いていった様に東へ北へと退いていったのではないかという推定をしている。しかし神話の比較や地名に関する分析は、言語において示された程の周到さ緻密さに欠け、かなり大胆な結論といわざるをえない。

この他 “The Hunter in Fairy Land,”<sup>(8)</sup> “The Birds Party,”<sup>(9)</sup> “An Aino Bear Hunt,” “Reply to Mr. Batchelor on the Words Kamui and Aino”,<sup>(11)</sup>「蝦夷語ト日本語ノ関係」<sup>(12)</sup> “Aino Folk-Lore,”<sup>(13)</sup> “Aino Folk-Tales, with Introduction by E. B. Tylor,”<sup>(14)</sup> “The Man Who Lost His Wife,”<sup>(15)</sup> 「批評蝦和英三対字書（ジョン・バチュラー著 北海道庁版）」<sup>(16)</sup> 等アイヌ語及びアイヌ民話に関する興味ある研究が主に1887～89年丁度帝国大学講師在任中になされている。“Reply to Mr. Batchelor on the Words Kamui and Aino” はアイヌ学者 John Batchelor とカムイの語とアイヌの語について論じたもので、先に紹介した帝国大学文科紀要第1冊に載ったものを補うものに過ぎない。この分野で主著とされる先の論文には蝦夷及びアイヌに関する文献目録が John Batchelor のアイヌ語文法とともに含まれている。

この文献目録は465種にわたり、金田一京助博士も驚嘆した程充実したものであり、新発見ともいふべき事柄、すなわち、日本最古のアイヌ語研究といわれる「蝦夷方言藻汐草」と一般に流布されていた著者・発行年月不詳の「藻汐草」との関係も明瞭にされ、その著者についても interpreter の上原熊次郎、administrator の阿部長三郎と始めて明らかにされている。これは当時でも稀少であった初版本を Chamberlain 自身所蔵していたもので、あちこちの書物に引用された流布本の由来、区別が比較的容易にできたのだと思われる。この様に広く文献を自ら蒐め、その一つ一つを実際に検討し、又現地調査をふまえて、アイヌ語の語法や特質を綿密に客観的に例証を挙げて学説を公けにしたことは、それまでの学界になおざりにされていたアイヌ語にあらためて脚光を当てることになり、しかも日本語との関連性というアングルでの研究も多くの人々の注意を喚起することになった。

### c. 琉球語研究

第三には琉球及び琉球語に関する研究である。Chamberlain は1893（明26）年3月琉球を訪れ1カ月程主として那覇に滞在，教育ある首里人数名より研究資料の一部をあつめたといわれるが，帰京後も続けて首里出身の一知識人から琉球語を95年まで習っている。1893年に“On the Manners and Customs of the Loochooans”<sup>(17)</sup> で琉球の言語について述べているのは最初の訪問で調査研究した資料による。つづいて1894年 “On the Loochooan Language,”<sup>(18)</sup> 1895年には “The Luchu Island and Their Inhabitants,”<sup>(19)</sup> “Two Funeral Urns from Loochoo,”<sup>(20)</sup> “A Comparison of the Japanese and the Luchuan Languages”,<sup>(21)</sup> 及び “Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language,”<sup>(22)</sup> を著わし，1896年には “Contribution to a Bibliography of Luchu,”<sup>(23)</sup> 1897年 “A Preliminary Notice of the Luchuan Language,”<sup>(24)</sup> を発表している。彼は病気のため1889（明23）年一時帰国していたが結局翌90年9月帝国大学を退官し，その後再び来日し，そして1892（明25）年マニラ経由三度めの帰国（最初は1880（明13）年眼病のため）をし，更に来日している。琉球に関する研究はすべてその後のものである。

マニラに数十日滞在した折は，同地の寺院に昔日本に渡来した伴天連（「牧師」，すなわちポルトガル語 Padre の訛）の遺文を訪ね，病弱の身でありながら1893（明26）年琉球に渡って資料蒐集・調査を行っている。琉球ははやくからヨーロッパ人探検家の関心の対象となっており，寄港・漂着などして見聞したことは彼らの旅行記に紹介されていた。特に Chamberlain の母方の祖父 Captain Basil Hall が軍艦 Lyra 号の艦長として遣支使節 Lord Amherst に随行して，1816（文化13）年朝鮮や琉球沿岸を調査し，帰途セント・ヘレナ島で Napoleon Bonaparte と会見し琉球について話をした，といわれている。Captain Hall はこの航海の記録を *Account of a Voyage of Discovery to the West Coast of Corea and the Great Loo-choo Island*<sup>(25)</sup> として出版し，巻末に附録の一つとして，同行の Herbert John Clifford に琉球語彙・文とその英訳，琉球語と日本語・琉球語とインス語の語彙比較，朝鮮西海岸住民から得た語彙，などを計70頁ではあるが，数詞などは漢字表記までまぜて，観察したままを notes としてつけ加えさせている。

この本が Chamberlain に影響を与えない筈はなく，再々度来日した折にやっと自ら琉球を訪れる機会をえたわけである。この分野での研究は1893年以後数年にわたって続々と発表されているが，なかでも95（明28）年6月アジア協会の会合で読まれ，やがてその紀要にのった “Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language” は日本語と琉球語との親族関係（affinity）を確定的にした不朽の論文である。

しかしこれ以前に，やはりアジア協会総会での講演を記録者が筆記した “A Comparison of the Japanese and the Luchuan Languages” で既に日本語と琉球語の語句の例，発音の

例をあげて比較をこころみ、姉妹語説をうち出している。殊に前述の代表的著作、琉球語文典及び辞典に関する試論では、祖父 Captain Hall の旅行記で僅かに琉球語の紹介があったが、それ以来77年間、石地に落ちた種子の様に、文法については何の発表もされていないので、敢えて困難をおかして、古語における両語が同一祖語から出た姉妹語であること、文法において語格論・文章論などに一致をみること、音声から文法にいたる例証を挙げ、琉球語彙をつけて、両語の同異・類似を明らかにしよう、と断っている。

これらの諸研究において、彼は琉球が言語においても民族においても古代日本と姉妹関係にあること、踏石としての対島とともに九州はアジア大陸にもっとも近く、九州に侵入して来た民族がその後伝説にあるように東上し、その際ついていけなかったものが琉球語として琉球にのこっている、という仮説をたて、言語研究上琉球語と古代日本語との比較は相互に多大の光明を与えるものである、といている。これによって日本語と琉球語が同じ祖語から分かれた方言であることが学問的に立証され、琉球語の言語現象は比較研究上貴重な資料となった。この一連の研究の啓発を受けて、伊波普猷氏の様な琉球の少壮有為の学徒が次々方言の研究、あるいは語源の研究にたづさわることになり、今日の進歩をみるのである。

#### d. 日本語古語研究

最後になったが、時代的には全く逆にごく初期のものであるが、その研究の着眼において今日なお異色であり、又彼の他の研究の基礎となったものに日本語古語・古文の研究がある。彼は東京に来るや、江戸時代の面影を多くとどめた芝西久保広町の曹洞宗青龍寺に居を定め日本古典の研究を志し、旧浜松藩士荒木某に教えを受け、古今集から読み始めたという。また鈴木庸正氏について萬葉集・枕草子等から謡曲・狂言の類を学び、自らも和歌を詠じ、橘守部の嗣子冬照の未亡人橘東世子刀自の歌会に列し、橘守部の遺著で未刊の稜威道別・稜威言別を橘家で借覧し、その研究を深めた。

この様な研鑽を経て1877（明10）年 “On the Use of *Pillow-Words* and Plays upon Words in Japanese Poetry,”<sup>(26)</sup> 翌年 “On the Mediaeval Colloquial Dialect of the Comedies,”<sup>(27)</sup> など、枕詞及びいひかけについて又狂言記の中世俗語について（これは足利時代の言語研究として最も早いものである）の論文や、その他大和物語や萬葉集、古今謡曲等の抄訳などがあるが、なかでも名著といわれるのは「英訳古事記」<sup>(28)</sup> であり、又日本の言語学界に記憶されなければならない “A Vocabulary of the Most Ancient Words of the Japanese Language”<sup>(29)</sup> という日本最古の語彙の研究を assisted by Mr. M. Ueda と記して、自分の教え子である若き学徒上田万年氏に資料を検討してもらって自分が概括したのだと断り、1888（明21）年発表している。今日でいうインフォーマントを使っていることも慎重な客観的研究方法といわなければならない。

この論文は、当時東洋研究が上海や横浜で外交官や宣教師など西洋の人たちによって盛になされていたが、その中で Joseph Edkins, D. D. : “Connection of Japanese with the Adjacent Continental Language”<sup>(30)</sup> とか Edward Harper Parkin: “The Yellow Language”<sup>(31)</sup> などの論文中、日本の単語が支那の単語から出たものだと説いているのに対しその比較方法が歴史的検討を経ない極めて表層的なものであること、言語の比較研究をする時は両語の古代言語を根本的に研究し、外来的なものと固有的なものをよく見きわめるべきであること、を力説している。その中で、古事記、日本書紀、萬葉集などの古典から約1300語彙を摘出、これを英訳しその語源的解釈をほどこし、推定ではあるが当時の古代発音を与えている。そして文法だけが borrowing hypothesis を肯定させる唯一の理由ではなく、歴史が、どの様にして借用を可能にさせたか説明できなければならない、と軽々しく結論をだすことをいましめている。これが発表された時代的背景を考えると、語彙集の量は少くとも言語の比較研究の方法をあきらかにした点、単に東洋研究者に対してでなく、国学という狭い日本語研究だけに閉じこもっていた日本の言語研究者を如何に啓発したか容易に想像されることである。

今までみて来たように、Chamberlain の言語学に関する研究分野は、日本語古語から現代の口語・文語の文法研究、アイヌ語研究、琉球語研究とひろく、それぞれの分野で、その業績において又その方法において独自のものであり、開拓者としての大きな足跡をのこしている。しかし一貫していえることは、彼が日本語を古代に溯って研究し、日本語研究ということとを常にその基盤としていたことである。対象が朝鮮語であっても、アイヌ語であっても、琉球語であっても、それは対象語への単なる興味ではなく、日本語との比較・対照をこころみ、日本語の系統をたづねるためであった。そのためには両語を用いる民族の風俗習慣まで調査検討している。そして民族移動の可能性を考え、仮説をたて、次々と日本を取巻く周囲の諸民族の言語を研究しているのである。表面にあらわれた類似性が実は偶然の一致に過ぎないもの、又表面は一見異なるものが古語において同一性をもつものなど、細心精緻な比較方法によって発見されている。

この様な段階を経て、琉球語が日本語と親族関係にあり同一祖語をもつ、という言語学史上画期的な論文が発表されたのである。彼はこのようにして日本語と同じ祖語から分れた姉妹語を発見し、その姉妹語と日本語との比較によって、今までの方法では遡れなかったところのもう一つ前の古い原始日本語 (Proto-Japanese) へ遡って研究しようという意図があった。それ故、隣接言語についての論文においても日本の国語学に脈々と鼓動を伝えるものがあるのである。

彼の個々の論文はそれぞれ独創性にとみ価値の高いものであるが、一つ一つ数え立てるよりは、今述べた様な研究態度・研究方法が当時の日本にとって全く新しいことで、名実ともにわが国博言学の草わけであり言語学の基を礎いた大先達というべきであろう。

#### 注

- (1) *Asiatick Researches* : or, Transactions of the Society, Instituted in Bengal, for inquiring into the History and Antiquities, the Arts, Societies, and Literatures, of Asia. Vol. 1 the Third Anniversary Discourse by the President 1786, xxv, pp. 415~431.
- (2) 1805 (文化2) 年発行という一説があるが、ここでは、『図書総目録』第1巻 岩波書店刊 昭38によった。
- (3) 1563 (永禄6) 年に肥後で病死したポルトガル人伊留満 (宣教師) Duarte da Silva には、日葡辞書と 日本文典 (*Arte da Lingua Japoneza*) という稿本があった。これらはヨーロッパ人による日本語の文典・辞書の嚆矢と伝えられている。
- (4) 1594 (文祿3) 年、天草の耶蘇会学林出版の *De Institutione Grammatica* ラテン文典によったもので、印刷された日本語文典の最初のものといわれている。
- (5) 以下 *TASJ* と略す
- (6) *The Chrysanthemum* Vol. III No. 3 pp. 105~106, March と Vol. III No. 5 pp. 228~229, May, 1883, Kelly & Co., Yokohama.
- (7) *Memoirs of the Literature College, Imperial Univ. of Japan*, No. 1 pp. 1~75, 1887
- (8) (*Aino Fairy Tales* No. 1), Kobunsha, Tokyo, 1887
- (9) (*Aino Fairy Tales* No. 2), Kobunsha, Tokyo, 1887
- (10) *TASJ*, Vol. XV Pt 1, 1887
- (11) 同上 Pt 2, 1887
- (12) 「東洋文芸雑誌」1887 (明20), 11. 20.
- (13) *Folk-Lore Journal*, Vol. VI No. 1, London, 1888
- (14) Privately Printed for the Folk-Lore Society, No. 22, London, 1888
- (15) (*Aino Fairy Tales* No. 3), Kobunsha, Tokyo, 1889
- (16) 「出版月評」1889 (明22), 7
- (17) *TASJ*, Vol. XXI, 1893
- (18) Report of the 64th Meeting of the British Association for the Advancement of Science, London, 1894
- (19) *Geographical Journal*, Vol. V, Nos. 3. 4. 5. 6, 1895
- (20) *Journal of the Anthropological Institute of Great Britain & Ireland* (以下 *JAI* と略す) Vol. XXIV, 1895
- (21) *TASJ*, Vol. XXIII, 1895
- (22) *TASJ*, Vol. XXIII, Supplement pp. 372, Dec., 1895
- (23) *TASJ*, Vol. XXIV, 1896
- (24) *JAI*, Vol. XXIV, 1897
- (25) Captain Basil Hall : *Account of a Voyage of Discovery to the West Coast of Corea and the Great Loo-choo Island*; with an Appendix, containing charts and various hydrographical and scientific notices by Captain B. Hall, and A Vocabulary of the Loo-choo Language, by H. J. Clifford, ESQ Lieutenant Royal Navy. John Murray, London, 1818
- (26) *TASJ*, Vol. V No. 1, 1877

- (27) *TASJ*, Vol. VI No. 2, 1878  
 (28) *TASJ*, Supplement, 1883  
 (29) *TASJ*, Vol. XVI, 1889 (Read 16th May, 1888)  
 (30) *TASJ*, Vol. XV, 1888, pp. 66~102  
 (31) 同上 pp. 1~12

## 参 考 文 献

*TASJ* は *Transactions of the Asiatic Society of Japan* の略

*JAI* は *Journal of the Anthropological Institute of Great Britain & Ireland* の略

*JAS* は *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain & Ireland* の略

Chamberlain, B. H.

Jitsu-go-Kiyo (The Teaching of the Words of Truth), *The Cornhill Magazine*, London, 1876. 8

The Death-Stone, A Lylic Drama from the Japanese (謡曲「殺生石」) *The Cornhill Magazine*, London, 1876. 10

On the Use of "Pillow-Words" and Plays upon Words in Japanese Poetry, *TASJ* Vol. V, 1877

Japanese Miniature Odes, *The Cornhill Magazine*, London, 1877. 7

The Maiden of Unahi ("Yamato Monogatari"), *TASJ* Vol. VI, 1878

On the Mediaeval Colloquial Dialect of the Comedies, *TASJ* Vol. VI, 1878

Educational Literature for Japanese Women (貝原益軒「女大学」) *JAS* Vol. X, 1878

Wasaubiyauwe, the Japanese Gulliver (「和莊兵衛」) *TASJ* Vol. VII, 1879

『英語変格一覽』 上下 一貫堂 明12 (1879)

***The Classical Poetry of the Japanese*, Trübner, London, 1880 (Trübner's Oriental Series).  
 an American ed. Boston, 1880. Enlarged ed., London, 1910**

A Short Memoir from the Seventeenth Century ("O-An-Monogatari"), *TASJ* Vol. VIII, 1880

Suggestions for a Japanese Rendering of the Psalms, *TASJ* Vol. VIII, 1880

Notes on the Dialect Spoken in Ahidzu, *TASJ* Vol. IX, 1881

A Translation of the "Dou-zhi-Keu" (「童子教」——"Teaching for the Young"), *TASJ* Vol. IX, 1881

Notes on Japanese Philology, the *Chrysanthemum* Vol. III, March & May, 1883

"Ko-ji-ki" or "Record of Ancient Matters" (「古事記」), *TASJ* Supplement to Vol. X, 1883. Reprint of the above: the index by Rev. N. Walter and A. Lloyd, and published separately. 2nd ed. with annotations by W.G. Aston and an appendix by Prof. Urū Tsugita, Kobe, 1932 (the index by H. J. Griffith).

On Two Questions of Japanese Archaeology, *JAS* Vol. XV, 1883

Vries Island (Oshima) Past and Present, *TASJ* Vol. XI, 1883

Notes by Motoori on the Japanese and Chinese Art, *TASJ* Vol. XII, 1884

On the Various Styles Used in Japanese Literature, *TASJ* Vol. XIII, 1885

The So-Called "Root" in Japanese Verbs—A Point of Grammatical Terminology, *TASJ* Vol. XIII, 1885

The Romanization of the Japanese Language, *Academy* No. 683, London, 1885 (also in

- China Review* Vol. XIV, 1885)
- The Fish boy-Urashima* (Japanese Fairy Series No. 8) Koubunsha, Tokyo, 1886 (明19)
- The Serpent with Eight Heads* (Japanese Fairy Series No. 9) Koubunsha, Tokyo, 1886 (明19)
- Past Participle or Gerund? — A Point of Grammatical Terminology, *TASJ* Vol. XIV, 1886
- A Romanized Japanese Reader*, consisting of Japanese anecdotes, maxims, etc, in easy written style, with an English translation and notes. 3vols., Trübner, London, 1886
- A Simplified Grammar of the Japanese Language* Trübner, London, 1886 (Trübner's Collection of Simplified Grammars of the Principal Asiatic and European Languages edited by Reinhold Rost, Vol. XV). Revised ed. by J. Garfield McIlory, Univ. of Chicago Press, Chicago. Trübner, London, 1924
- On the Quasi-Characters Called "Yajirushi," *TASJ* Vol. XIV, 1886
- 神字有無論, 「東洋学芸雑誌」第3巻第60号 明19. 10 (1886)
- 支那語読法ノ改良ヲ望ム, 「東洋学芸雑誌」第3巻第61号 明19. 10 (1886)
- The Silly Jelly-Fish* (Japanese Fairy Series No. 13) Koubunsha, Tokyo 1887 (明20)
- My Lord Bag-O'-Rice* (Japanese Fairy Series No. 15) Koubunsha, Tokyo, 1887 (明20)
- The Hunter in Fairy Land* (Aino Fairy Tales No. 1) Boston & Tokyo, Koubunsha 1887 (明20)
- The Birds Party* (Aino Fairy Tales No. 2) Koubunsha, Tokyo, 1887 (明20)
- An Aino Bear Hunt, *TASJ* Vol. XV, 1887
- The Language, Mythology, and Geographical Nomenclature of Japan, Viewed in the Light of Aino Studies, *Memoirs of the Literature College, Imperial University of Japan* No. 1 1887
- Reply to Mr. Batchelor on the Words Kamui and Aino, *TASJ* Vol. XV, 1887
- 『日本小文典』 文部省編輯局 明20 (1887)
- Directions for the Pronunciation of English* 文部省編輯局 明20 (1887)
- Preface to the "Brief History of Dance and Music" by K. Konakamura, (歌舞音楽略史序) Tokyo, 1887
- Rodriguez' System Transliteration, *TASJ* Vol. XVI, 1888
- A Handbook of Colloquial Japanese* Trübner, London 1888. 4th ed. London, 1907. 仏語本 Emmanuel Tronqueis 訳 Yokohama, 1901 (明34)
- Aino Folk-Lore, *Folk-Lore Journal* Vol. VI, London, 1888
- Notes on the Japanese Go-Hei, or Paper Offerings to the Shinto Gods, *JAI* Vol. XVIII, London, 1888
- On Two Questions of Japanese Archaeology, *JAS* XV, London, 1888
- A Vocabulary of the Most-Ancient Words of the Japanese Language, assisted by Mr. M. Ueda, *TASJ* Vol. XVI, 1888
- Aino Folk-Tales, with Introduction by E.B. Tylor. London, 1888 (Privately printed for the Folklore Society No. 22). reprint, 1967
- (那珂通世氏の年代考に対する) ちゃんべれん先生の回答, 「文」第1巻第13号 明21 (1888)
- The Man Who Lost His Wife* (Aino Fairy Tales No. 3) Koubunsha, Tokyo 1889 (明22)
- A Review of Mr. Satow's Monograph on "The Jesuit Mission Press in Japan 1591~1610", *TASJ* Vol. XVII, 1889
- What Are the Best Names of the "Bases" of Japanese Verbs? *TASJ* Vol. XVIII, 1890

- Things Japanese, being notes on various subjects connected with Japan* Kegan Paul, London 1890. reprint of 5th ed., revised with the addition of two appendices London & Kobe. 1927, 日本語訳 高梨健吉訳「東洋文庫」1, 2. 昭44 (1971)
- A Handbook for Travellers in Japan* 3rd ed., revised, and for the most part re-written. (Joint work with W. B. Mason, 1st and 2nd eds, being by E. M. Satow and A. G. S. Hawes) John Murray, London 1891. 8th ed. revised, and partly re-written 1907. 9th ed. revised 1918. 独語訳 B. Kellermann 訳 Berlin, 1923. 仏語訳 M. Loge 訳 Paris, 1931
- Notes on Some Minor Japanese Religious Practices, *JAI* Vol. XXII, 1892—3
- On the Manners and Customs of the Loochooans, *TASJ* Vol. XXI, 1893
- Ryōshu's Picture of Fudo (宇治拾遺物語「絵仙師良秀家の焼くるを見て喜ぶこと」)「日本英学新誌」第3巻第35号 明26 (1893)
- Orchids (北窓瑣談第1巻)「日本英学新誌」第3巻第36号 明26 (1893)
- Comparing Beauty (戦国策「美を較ぶること」)「日本英学新誌」第3巻第41号 明26 (1893)
- On the Loochooan Language, *Report of The 64th Meeting of the British Association for the Advancement of Science held at Oxford in August 1894* John Murray, London 1894
- The Robe of Feathers (謡曲「羽衣」)「日本英学新誌」第4巻第44号 明27 (1894)
- A Discussion on the New Departure (福沢諭吉「維新の辞」)「日本英学新誌」第4巻第47号 明27 (1894)
- The Fisher Boy Urashima (万葉集「詠水江浦島子」)「日本英学新誌」第4巻第48号 明27 (1894)
- Ribs and Skin (狂言「骨皮」)「日本英学新誌」第5巻第58. 59. 60号 明27 (1894)
- A Hint as to How to Serve a Master (君に仕うる心得「曾呂利が事」)「日本英学新誌」第5巻第62号 明27 (1894)
- The Luchu Island and Their Inhabitants, *Geographical Journal* Vol. V, Nos. 4. 5. 6. 1895
- Two Funeral Urns from Loochoo, *JAI* Vol. XXIV, 1895
- A Comparison of the Japanese and the Luchuan Languages, *TASJ* Vol. XXIII, 1895
- Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language, *TASJ* Supplement to Vol. XXIII, 1895. A partial translation was published by E. Kanagusuku in the *Hogen* (方言), Vol. IV, 1933. A complete translation by E. Yamaguchi, Okinawa, 1976.
- Contribution to a Bibliography of Luchu, *TASJ* Vol. XXIV, 1896
- NAKAMITSU (謡曲「仲光」)「日本英学新誌」第7巻第92号 明29 (1896)
- Preliminary Notice of the Luchuan Language *JAI* Vol. XXVI, 1897
- A Quinary System of Notation Employed in Luchu on the Wooden Tallies Termed Shō-chū-ma, *JAI* Vol. XXVII, 1898
- Notes on a Long-Tailed Breed of Fouls in Tosa, *TASJ* Vol. XXVII, 1899
- A Practical Introduction to the Study of Japanese Writing*(文学のしるべ) Lockwood & Son, London, Yokohama, 1899. 2nd and revised ed., with an alphabetical index of characters in addition, Yokohama, 1905, 露語訳 G. I. Dolya 訳 Sankt-Peterburg, 1910
- 羅馬字新綴方反対意見, 「日本英学新誌」明32. 10 (1899)
- Basho and the Japanese Poetical Epigram, *TASJ* Vol. XXX, 1902
- On Japanese Short Poem (By the courtesy of Mr. Sasaki)「帝国文学」第10巻第43号 明37 (1904) translated under the title "Omoi-gusa wo yomite" and published in the *Kokoro-no-Hana* (「心の花」) Vol. VIII, No. 3, 1904
- 国語調査意見書(訳文)(A Memoir Addressed to Mr. T. Watanabe concerning the Language Policy of Japan), 明38 (1905)



- Japanese Fairy Tales* (Gowan's International Library, 13) London 1907. reprint, London 1920
- Grammatika yaponskago razgovornago yazyka. Privat-Dotsent. Sankt-Peterburg. Universiteta V. Kostyleva. (*Izdanie Fakul'teta Vostochn. Yazykov Imp. Sankt-Peterburg. Universiteta*, No. 28). Sankt-Peterburg, 1908
- Preface to the *New Collection of a Hundred Yōkyoku* edited by Y. Haga and N. Sasaki (新謡曲百番序). Tokyo 1910
- ラフカディオ・ハーン, 「心の花」第15巻第1号 明44 (1911)
- The Invention of a New Religion (Rationalist Press Association, *Liberary Guide*, 1912) reprinted as Appendix I in the 1927ed. of the *Things Japanese*. reprint, Canton, 1933.
- 独語訳 *Deutsche Japan-Post* Bd. 10 1911-12, Bd. 11, 1912-13. 日本語訳 田中明訳「近代文学」昭28. 7. (1953)
- ゼネバ湖畔より, 「心の花」大 1.8. 大 2.2 大 2.7 大 5.1 大 7.12 大 9.6 大 10.2 昭 2.1
- Uproshchennaya grammatika yaponskago yazyka. Perevod Privat-Dotsent, Sankt-Peterburg. Universiteta V. Kostyleva. (*Izdanie Fakul'teta Vostochn. Yazykov Imp. Sankt-Peterburg. Universiteta*, No. 31) Sankt-Peterburg, 1908
- Huit siècles de poésie française* (仏蘭西詞華集), Payot, Paris 1927
- Love-Song (相聞), 市河三喜編 「岡倉先生記念論文集」 昭 2 (1927)
- Encore est vive la souris (Pensées et reflexions)* Payot, Lausanne, 1933 日本語訳 吉阪俊蔵訳「岩波新書」 昭14 (1939)
- Aston, William George, *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language*. Trübner, London, 1869
- Boller, Anton, *Nachweis dass das Japanische zum Ural-Altaischen Stamme gehört* Wien, 1857
- Boxer, Charles Ralph, "Some Aspects of Portuguese Influence in Japan 1542-1640", *The Japan Society London Transactions and Proceedings* Vol. 32, 45session, pp. 13-64
- Goodman, Grant Kohn, "The Dutch Impact on Japan 1640-1853", *Monogr. du T'Oung Pao*, Vol. 5, Leiden, 1967
- Hall, Basil, *Account of a Voyage of Discovery to the West Coast of Corea and the Great Loo-choo Island*; with an Appendix, containing charts and various hydrographical and scientific notices by Captain B. Hall, and a vocabulary of the Loochoo Language by H. J. Clifford, Esq. Lieutenant Royal Navy. John Murray, London, 1818
- James, Grace, "Basil Hall Chamberlain", *Transactions and Proceedings of the Japan Society* Vol. 32, London, 1935, xi-xv
- Lindley, Murray, *English Grammar*, adapted to the different classes of learners, with an Appendix, containing rules and observations for promoting perspicuity in speaking and writing. Wilson, Spence and Mawman, 1795
- McIlory, James Garfield, Majer revised, *A Simplified Grammar of the Japanese Language* by Basil Hall Chamberlain. University of Chicago Press, Chicago. Trübner, London, 1924
- Purnell, C. J., *The Log-Book of William Adams 1614-19 with the Journal of Edward Saris and Other Documents Relating to Japan, Cochín, China, etc.* Eastern Press, London & Reading, 1916
- Sansom, G. B. C. M. G., *A Historical Grammar of Japan*, Oxford, 1928
- Satow, E. M. & Ishibashi, M., *Japanese Dictionary of the Spoken Language*. 1875

Satow, Ernest Mason, *An English Japanese Dictionary of the Spoken Language*, Trübner, London, 1876

\_\_\_\_\_, *Jesuit Mission Press in Japan 1591-1610*, Privately printed, 1888

Thumborg, Carl Peter, *Resa uti Europa, Africa, Asia, förrättad ären 1770-1779* Vol. III Japanska språket, Up'sala, 1788-93, pp 294~353.

\_\_\_\_\_, "Observationes in linguam Japonicam", *Nova Acta Regiae Societatis Scientiaium Upsaliensis* V, 1792, pp. 258-273

国際文化振興会：『バジル・ホオル・チェンバレン先生追悼記念録』 昭10（1935）

大槻如電原著・佐藤栄七増訂：『日本洋学編年史』 錦正社 昭40（1965）

大村嘉吉・高梨健吉編：『日本の英学 100年』 研究社 1969

佐々木信綱編：『王堂チェンバレン先生』 好学社 1948

豊田実著：『日本英学史の研究』 岩波書店 1939

〔本学短期大学部助教授（英語学） 1976年度 個人研究員〕